慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コミュニカティブ・アプローチが学習意欲に及ぼす効果
Sub Title	
Author	倉八, 順子(Kurahachi, Junko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1995
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.42 (1995.) ,p.38- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000042-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学志望動機の関係

第826号　田村　裕子　留学生受け入れ政策についての研究—「留学生10万人計画」を中心として—

第827号　童　　偉鶴　中国近代化における福沢諭吉思想の意義
—近代化の師匠を求めて—

博　士（平成6年度）

*本紀要第40号の学事報告において，平成6年度分の学位記号番号が記載されていなかったため，改めてこれを以下に示す。

社会学博士

甲　第1327号　澤井　　敦

マンハイム知識社会学の研究

教育学博士

甲　第1328号　鹿毛　雅治

内発的動機づけに及ぼす教育評価の効果

博　士（平成7年度）

教育学博士

甲　第1378号　倉八　順子

コミュニカティブ・アプローチが
学習意欲に及ぼす効果

〔論文審査担当者〕

主査　早稲田大学教育学部教授
同大学院教育学研究科委員
元慶應義塾大学大学院社会学研究科委員
教育学博士　並木　博

副査　上智大学外国語学部教授
文学修士　吉田　研作

副査　慶應義塾大学文学部教授
同大学院社会学研究科委員
教育学修士　冨安　芳和

内容の要旨

本研究は，我が国で伝統的に行われてきた文法中心の英語教授法（グラマティカル・アプローチ：GA）と意志伝達能力の習得を重視する新しい教授法（コミュニカティブ・アプローチ：CA）とを比較検討した教授心理学的研究である。本研究における一連の実験授業は，著者を含むプロジェクト・ティームによって行われたものであり，そこで得られた厖大なデータのうち，著者は特に教授法と学習意欲の関連性に焦点を合わせて詳細な分析を行い，コミュニカティブ・アプローチという新しい教授法の教授心理学的特質を明らかにした。

本論文は4つの章より成る主論文，学会機関誌及び紀要にすでに発表済の論文8編をまとめた別冊の参考論文集，及び同じく別冊の実験授業の教材集の三部作である。

主論文第1章「外国語習得における学習者の情意要因」では，外国語習得のメカニズムの因果モデルを1970年代より現在に至るまで幾つかの時代区分によって展望し，外国語学習の規定要因であり，また結果でもありうる学習意欲の理論的位置づけを行い，それに続いて学習意欲の操作化の方向を探り，この概念の実験的取扱いの見通しを明らかにしている。

なお，この章の内容の一部は，教育心理学研究（第42巻，第2号，1994年）に「第二言語習得における個人差」と題する論文として掲載されており，この中で著者は外国語教授法を第二言語習得理論，認知能力的適性，情意的要因，及び適性処遇交互作用（ATI）との関連で展望し，著者の行った一連の実験的研究の意義の再確認を行っている。

第2章「コミュニカティブ・アプローチと学習者の情意要因」では，1970年代にヨーロッパに誕生したコミュニカティブ・アプローチの歴史をたどり，言語理論との関連性を論じ，教授心理学的観点より検討を加えた上で，具体的な教示手続を述べ，さらにこの教授法と学

習意欲，学習成果，及び適正との関連性を考察し，最後に本研究の目的と計画を掲げてこの章を閉じている。

第3章「コミュニカティブ・アプローチが学習意欲及び学習成果に及ぼす効果に関する実験的検討」では，第1節から第5節にわたり順次第1実験から第5実験までが報告されているが，以下のように第1実験をやや詳細に，残る4実験はその概略のみを記すことにする。

第1実験は，CAとGAの比較を，学習意欲に及ぼす影響，学習意欲が学習に及ぼす効果，及び外国語に対する態度，不安傾向，知能偏差値等の個人差が学習意欲と学習に及ぼす影響に関して行うことを目的としている。被験者はダイレクトメイルにより募集した小学生89名であり，これをCA, GA各4クラスに割り当て，二つの教授法の訓練を受けた4名の教師がCA, GA各1クラスを担当した。全ての授業はリモコン・カメラによって録画されて，二つの教授法に従って授業が行われているかモニターする。英語入門の授業は1日2時間ずつ10日間にわたって行われる。主な結果を挙げれば，他者評定，自主的な学習行動，及び自己評定によって得られる学習意欲の測度は，この学習期間を通じていずれも同じ推移のパターンを示し，CAでは意欲が次第に高まるのに反して，GAでは次第に低下する。パス解析の結果は，学習意欲が学習に及ぼす影響がCAとGAでは異なることを明らかにしており，CAでは外国語に対する態度がoralテストに対して，また意欲が筆記テストに対してそれぞれ強く影響するが，知能偏差値はこれに対して無関係である。一方，GAでは同じ態度が直接的ではなく，学習意欲を介してoralテストに影響し，また知能偏差値が筆記テストに強く影響する。また，外国語に対する態度を適正の測度，oralテスト得点を結果の測度とした場合に，典型的なATIパターンが得られ，CAでは右上がりの回帰直線，GAではほぼ水平の回帰直線となり，GAでは態度が無関係であることを明らかにしている。なおこの実験は，著者を筆頭者とする共同研究として教育心理学研究（第40巻，第3号，1992年）に「コミュニカティブ・アプローチと学習意欲」と題して掲載されている。

第2実験は，第1実験の被験者群を用いて，入門英語の学習期間を8か月55時間にまで長期化した時のCA, GAの学習意欲の変化を調べることを主たる目的としている。主な結果として，教授手続上問題のあった1名を除いた3名の教師の間にも，CA, GA両条件における学習意欲の長期間の推移に大きな差が見られ，教師1では全体的にCAの方が高く，教師2ではこれが逆転し，教師3では両条件に差が認められない。この様に学習意欲に関しては教師要因が大きく効いている。コミュニケーション能力を結果の測度とした場合，ここでも教師要因の効果が教授法の効果よりも大きく効いている。つまり，CAでは教師の力量の差が決定的であることが明らかとなった。

第3実験は，CAとGAという教授法の要因と日本人教師に外国人講師がつけ加わるティームティーチングの要因2×2のデザインによっている。被験者は小学校6年生158名であり，これを2要因を組合わせて得られる4つの教授条件群に割り当て，全てのクラスを著者自身が担当し，一人の外国人講師が上の4条件群のうち2条件群で教師を補佐する。また本実験で，各条件群を約40名としたのは，特にCAが我が国の通常のクラスサイズでも有効であるかどうかを吟味するためである。主な結果は，CAの方がGAに比べて，oralテストで良い成績をおさめ，また意志伝達的活動への動機も高い。外国人講師とのティームティーチングは筆記テストで良い結果をもたらしたが，oralテストでは有意な差が認められない。なお，この実験は教育心理学研究（第41巻，第2号，1993年）に「コミュニカティブ・アプローチ及び外国人講師とのティームティーチングが学習成果と学習意欲に及ぼす効果」と題する論文として掲載されている。

第4実験は，コミュニカティブ・アプローチに文法規則の説明を加えたweak versionと，コミュニケーション活動のみを行うstrong versionとの比較を筆記能力及び口頭表現力，学習意欲，及びATI効果に関して行うことを目的としている。被験者は前実験に参加したもののうち，次の段階の初級英語の学習を希望したものであり，教授条件は2種類のコミュニケーション活動を行うCAと1種類のコミュニケーション活動に文法規則の明示的な説明を加えたCAの二つである。著者自身と外国人講師1名のティームティーチングにより，75分の授業を6回行った。主な結果としては，文法規則の教示を加えることが成績の改善につながらず，また学習意欲の低下をきたした。その他有意なATIが幾つか確認された。なお本実験は，教育心理学研究（第42巻，第1号，1994年）に，「コミュニカティブ・アプローチにおける規則教授が学習成果及び学習意欲に及ぼす効果」と題して掲載されている。

最後の第5実験は，実験授業に34組の双生児を用いることによって，可及的に条件の統制をはかるという画期的な試みである。教授条件は，グループ単位のコミュ

ニケーション活動と個人単位の自由度の高いコミュニケーション活動を行うCAと，文法規則の明示とグループ単位の規則についてのゲーム活動を行うGAの二つであり，両条件とも著者自身と外国人講師のティームティーチングにより，75分ずつ8回の初級英語の授業を行った。主な結果として，GAが筆記能力においてより大きな学習転移を示し，CAが聴き取り能力でより良い成績をおさめた。またCAでは，個別的なコミュニケーション活動に対する動機づけが高く，英語学習に対するより強い自我関与を示した。なお本実験は，教育心理学研究（第43巻，第1号，1995年）に，「グラマティカル・アプローチとコミュニカティブ・アプローチが学習成果と学習意欲に及ぼす質的差異」と題して掲載されている。

第4章「全体的考察」では，一連の実験の結果を，学習意欲，学習成果，因果プロセス，及びATIについてそれぞれ全体的考察を行っているが，主な結果は既に触れたので省略する。最後に著者は，本研究の教育学的意義と今後の課題を論じてこの章を閉じている。

論文審査の要旨

本研究の特長を挙げれば，その一は著者を含む若手研究者6名がプロジェクト・ティームを編成し，住民台帳よりダイレクトメールで被験者を募り，十分な期間にわたる実験授業を行ない，各メンバーの関心より多角的なデータを収集し，各自結果の分析を分担して，その成果として実に多数の研究報告を行なってきたことである。教育心理学年報（第33集，1993年）の中で，麻柄啓一氏（千葉大助教授）が教授・学習部門の最近の研究動向を概観し，特に著者等の研究を詳細にわたり取上げて，“ちょこっと研究”が多い中で，“すごい研究”が同一の大学関係者の中から多数産出されたことを讃え，教授・学習研究の望ましい方向として高く評価している。被験者の公募は三度にわたり行われ，延べ人数は500名にものぼるが，著者はこのプロジェクトの中で終始推進役を務めて大きな成果を上げたのである。

その二は，著者の知的生産性の高さにある。著者は博士課程在学中の3年間に8編の論文を公けにし，しかもそのうちの5編は，既に述べたように日本教育心理学会の厳しい審査を経て学会機関誌に掲載されたものである。この傑出した実績は，本研究が質量ともに極めて優れたものであることを裏付けて余りある。

その三は，著者は海外滞在の5年間を含む7年間の長きにわたり，初級英語の教師の経験を積み，これを踏まえて本研究を計画し，遂行したことである。従って，著者等の行った一連の英語教授法の比較研究は，著者なしではあり得ないものであり，また例えば第3実験で試みたように，40名の通常のクラス・サイズで実験授業を行うことにより，実験の生態学的妥当性を高めることを目指しているが，この様な努力が随所に見られ，その結果，本研究の英語教育に対する寄与は極めて大きい。また，我が国における英語教授法の本格的な教授心理学的研究は本研究をもって嚆矢とする。

しかし，以上のように本研究は極めて優れたものであるが，一連の実験報告に瑕瑾なしとはしない。最後に本研究の今後の課題を含めて幾つかの問題点を指摘しておきたい。特に第1実験，第2実験について，教師要因と教授方法との間の交互作用の可能性を看過したことが残念である。教師の個性と教授法の間には微妙な相性があり得るのであり，これらの実験データもそのような可能性を示唆している。また教師の授業行動の特徴づけにより，このような交互作用の解析を試みることも今後の課題である。

次に，適正処遇交互作用は本研究に一貫した関心事の一つであるが，結果の分析を各メンバーが分担したためもあって，著者は情意的側面にのみ着目している。しかし，このような教授学習過程の研究において，認知能力的な適正と情意的側面の個人差は，同時にATIパラダイムの中で扱われるべきであり，またその技法も既に確立している現在，そのような分析も試みるべきであり，今後の課題の一つとしておきたい。

最後に標本の代表性について十分な検討が行われておらず，このような手続で得られる被験者集団は学習意欲も知的水準も甚だ高い方へ片寄っているおそれがあり，従って本研究で得られた豊富な知見も，そのまま通常の学校現場へ一般化することには自ずと限界がある。今後，普通の学級において本研究の追試を行うことも残された課題である。

しかし，以上の問題点も，倉八順子君の研究全体の水準の高さと語学教育の実践への多大の寄与を考える時に，その評価をいささかも妨げるものではなく，文字通り瑕瑾に過ぎない。同君は英語教授法の比較研究のために教授心理学的な理論と分析方法を自家薬籠中の物として正に先駆的な仕事を成し遂げたのであり，同君の業績は博士（教育学）の学位にふさわしいものと認められる。